

勤 務校の図書室が多量の古書を廃棄処分するというのでもらってきましたが、中央公論社『ポー／ホーソン集』の付録に中井久夫先生が「ポーの庭園」を執筆されています。ポーといえはすぐに思い浮かぶ「アッシャー家の崩壊」とか「盗まれた手紙」ではなく、静謐な描写の続く「アルンハイムの地所」を取り上げ、知性への惑溺と自己陶醉、酩酊する中での遡行といった作家の内的因子から読み解いておられます。カヴァフィスやリッツォスの詩を翻訳される際にも、われわれ常人とは異なる情景を目にしておられたことでしょう。

残念ながら私は直接交流させていただく機会がありませんでしたが、名著『カヴァフィス全詩集』を読んでゾクゾクした思い出があります。「イタカ」の最後の部分を「その時にはイタカの意味がわかる／おのおのにとってのイタカの意味がな」と訳されているのですが、原文はここだけ「イタカ」が複数形 *Ιθάκες* です。英訳なら *Ithakas* で済むところ。詩の狙いを伝え切るために「おのおのにとって」を追加されるという、翻訳への徹底したこだわりで震えを感じました。ご冥福をお祈りいたします。(橘)

寸 鉄詩とも訳される短い詩「エピグラム」と風刺詩^{サテュラ}を志田信男先生はことのほか愛し実作もしておられました。墓碑や奉納物の碑文に起源をもつ寸鉄詩は簡潔を旨とし、人間の内側を辛辣かつ軽妙洒脱に抉り出します。エピグラム詩人マルティアリスに心服した志田先生は自作の作品集『やばのろぎあエピグラム・マルティアリスの倣び』（筆名しだのぶお）を上梓されました。

西洋古典を研究された志田先生が現代詩人セフェリスに強い親近感を抱いたのはアイスキュロスに対する「格別な傾倒」という共通点があったからです。この悲劇詩人が因縁となり訳詩選集『セフェリス詩集』が生まれました。志田先生の訳に遊びや落ちを感じる場合があります。「拒否」(*Αρνῆσι*)の最後の節「…どんな欲望と情熱で／ぼくらは人生を選んだことか、ミステークさ！／だから、ぼくらは生活を変えた」。カタカナの表記が軽妙さを添える「ミステークさ！」は「ぼくら」が放つ自虐的な捨て台詞のようにも訳者からの慰めのようにも読めます。どこからかまた「君は詩を書かないからなあ…」、先生の溜息が聞こえてきそうです。(佐藤)